

# 『土』に就て

——長塚節著『土』序——

夏目漱石

青空文庫



「土」が「東京朝日」に連載されたのは一昨年のものである。そうして其責任者は余であつた。所が不幸にも余は「土」の完結を見ないうちに病気に罹つて、新聞を手にする自由を失つたぎり、又「土」の作者を思い出す機会を有たなかつた。

当初五六十回の予定であつた「土」は、同時に意外の長篇として発達していった。途中で話の緒口を忘れた余は、再びそれを取り上げて、矢鱈な区切から改めて読み出す勇気を鼓舞しにくかつたので、つい夫限に打ち遣つたようなものの、腹のなかでは私かに作者の根気と精力に驚ろいていた。「土」は何でも百五六十回に至つて漸く結末に達したのである。

冷淡な世間と多忙な余は其後久しく「土」の事を忘れていた。

所がある時此間亡なくなつた池辺君に会つて偶然話頭が小説に及んだ折、池辺君は何故なぜ「土」は出版にならないのだろうと云つて、

大分長塚君の作を褒ほめていた。池辺君は其当時「朝日」の主筆だつたので「土」は始から仕舞しまい迄眼を通したのである。其上池辺

君は自分で文学を知らないと言いながら、其实摯しじつ実な批評眼をもつて「土」を根気よく読み通したのである。余は出版界の不景気

のために「土」の単行本が出る時機がまだ来ないのだろうと答えて置いた。其時心のうちでは、随分「土」に比べると詰らないものも公けにされる今日だから、出来るなら何時いつか書物に纏まとめて置いたら作者の為に好かろうと思つたが、不親切な余は其日が過ぎ

ると、又「土」の事を丸まるで忘れて仕舞った。

すると此春になつて長塚君が突然尋ねて来て、漸ようやく本屋が「土」を引受ける事になつたから、序を書いて呉くれまいかという依頼である。余は其時自分の小説を毎日一回ずつ書いていたので、「土」を読み返す暇がなかつた。已やむを得ず自分の仕事か済む迄待つてくれと答えた。すると長塚君は池辺君の序も欲しいから序ついでに紹介して貰もらいたいと云うので、余はすぐ承知した。余の名刺を持つて「土」の作者が池辺君の玄関に立ったのは、池辺君の母堂が死んで丁ちやうど度三十五日に相当する日とかで、長塚君はただ立ちながら用事だけ文を頼んで歸つたそうであるが、それから三日して肝かんじん心の池辺君も突然亡なくなつて仕舞しまつたから、同君の序はどうとう手に

入らなかつたのである。

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を読み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しまるつぶにして漸く業を卒おえて考えて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元来が安価な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、此「土」に於おいても全くそうであつた。先まず何よりも先に、是これは到底余に書けるものではないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだろうと物色して見た。すると矢張誰やはりにも書けそうにないという結論に達した。

もつと尤も誰にも書けないと云うのは、文を遣やる技倆ぎりようの点や、人間

を活躍させる天賦てんぷの力を指すのではない。もし夫れ丈そだけの意味で誰も長塚君に及ばないというなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を担かつぎ過ぎる策略とも取れて、何方ちちらにしても作者の迷惑になる計ぼかりである。余の誰も及ばないというのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上っていないという意味なのである。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆うじ同様に憐あわれな百姓の生活である。先祖以来茨城いばらきの結ゆ城郡ぐんに居を移した地方の豪族として、多数の小作人を使用する

長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊こんぱいを極きわめた生活状態

を、一から十迄誠実に此「土」の中に収め尽したのである。彼等の下卑で、浅薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさえ上りがたい所を、ありありと眼に映るように描写したのが「土」である。そうして「土」は長塚君以外に何人も手を着けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直叙したものであるから、誰も及ばないと云うのである。

人事を離れた天然に就いても、前同様の批評を如何な読者も容易に肯わなければ済まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を綿密に研究している。畠のもの、畔に立つ榛の木、蛙の声、鳥の音、苟くも彼の郷土に存在する自然なら、



一点一画の微に至る迄悉く其地方の特色を具えて叙述の筆に上つている。だから何処に何う出て来ても必ず独特である。其独特な点を、普通の作家の手に成つた自然の描写の平凡なのに比べて、余は誰も及ばないというのである。余は彼の独特なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞う失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の観察者である。

作としての「土」は、寧ろ苦しい読みものである。決して面白いから読めとは云い悪い。第一に作中の人物の使う言葉が余等には余り縁の遠い方言から成り立っている。第二に結構が大きい割に、年代が前後数年にわたる割に、周囲に平たく発達したがる話、筋をくつきりと描いて深くなりつつ前へ進んで行かない。だ

から全体として読者にアクセレレーション加速速度の興味を与えない。だから事  
 件が錯綜纏綿さくそうてんめんして纏もつれながら読者をぐいぐい引込んで行くよ  
 りも、其地方の年中行事を怠おこたりなく丹念に平叙して行くうちに、  
 作者の拵こしらえた人物が断続的に活躍すると云つた方が適當になつ  
 て来る。其所そこに聊いささか人を魅する牽引けんいん力を失う恐ひそが潜ひそんでい  
 るという意味でも読みづらい。然し是等これらは単に皮相の意味に於て読  
 みづらいので、余の所謂いわゆる読みづらいという本意は、篇中の人物  
 の心なり行なりが、ただ圧迫と不安と苦痛を読者に与える丈だけで、  
ごう毫も神の作つてくれた幸福な人間であるという刺戟しげきと安慰を与え  
 得ないからである。悲劇は恐しいに違ちがない。けれども普通の悲劇  
 のうちには悲しい以外に何かの償つぐないがあるので、読者は涙の犠牲

を喜ぶのである。が、「土」に至つては涙さえ出されない苦し  
 さである。雨の降らない代りに生しょうがい涯がい照りつこない天気と同じ  
 苦痛である。ただ土の下へ心が沈む丈だけで、人情から云つても道義  
 心から云つても、殆んど此圧迫の賠ばい償しょうとして何物も与えられ  
 ていない。ただ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行く丈である。

「土」を読むものは、屹きつと度自分も泥の中を引き摺ずられるような氣  
 がするだろう。余もそう云う感じがした。或者は何故なぜ長塚君はこ  
 んな読みづらいものを書いたのだと疑がうかも知れない。そんな  
 人に対して余はただ一言、斯かよう様な生活をして居る人間が、我々と  
 同時代に、しかも帝都を去る程ほどとお遠とほからぬ田舎いなかに住んで居るとい  
 う悲惨な事実を、ひしと一度は胸の底に抱だき締しめて見たら、公等

の是から先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの

参考として利益を与えはしまいかと聞きたい。余はとくに歡樂に

憧しょうけい憬けいする若い男や若い女が、読み苦しいのを我慢して、此

「土」を読む勇気を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年頃になつて、音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと云い募つる時

分になつたら、余は是非此「土」を読みたいと思つて居る。娘

は屹きつ度と厭いやだというに違ちがない。より多くの興味を感ずる恋愛小説と

取り換えて呉くれというに違ちがない。けれども余は其時娘に向つて、

面白いから読めというのではない。苦しいから読めというのだと

告げたいと思つて居る。参考の為だから、世間を知る為だから、

知つて己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる為だから我

慢して読めと忠告したいと思つて居る。何も考えずに暖かく成長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心ぼだいしんや宗教心は、皆此暗い影の奥から射して来るのだと余は固く信じて居るからである。

長塚君の書き方は何処迄も沈着である。どこまで其人物は皆有ありの儘ままである。話の筋は全く自然である。余が「土」を「朝日」に載せ始めた時、北の方のSという人がわざわざ書を余のもとに寄せて、長塚君が旅行して彼と面会した折の議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「満韓ところどころ」というものをSの所で一回読んで、漱石という男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したそうである。漱石に限らず一体「朝日新聞」の記者

の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたそのしのである。

成程なるほどまじめ真面目に老成した、殆んどほと嚴肅という文字を以て形容して

然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤ももつとの事である。「満

韓とところどころ」など杯が君の気色を害したのは左もさあるべきだと思

う。然ししか君からけい軽いちよう佻の疑を受けた余にも、真面目な「土」を

読む眼はあるのである。だから此序を書くのである。長塚君はた

またま「満韓とところどころ」の一回を見て余の浮薄をいきどお憤つたのだ

ろうが、同じ余の手になつた外ほかのものに偶然眼を触れたら、或は

反対の感を起すかも知れない。もし余が徹頭徹尾「満韓とところど

ころ」のうちで、長塚君の気に入らない一回を以て終始するなら

ば、到底とうてい長塚君の「土」の為に是これほど程言辭を費やす事は出来な

い理窟りくつだからである。

長塚君は不幸にして喉頭結核にかかつて、此間迄東京で入院生活をして居たが、今は養生かたがた旁旅行の途にある。先せん達てかねて紹介して置いた福岡大学の久保博士からの来書に、長塚君が診察を依頼に見えたとあるから、今頃は九州に居るだろう。余は出版の時機おくに後れないで、病中の君の為に、「土」に就いて是これだけ丈の事を言い得たのを喜ぶのである。余がかつて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを読む義務はないと云つたと、わざわざ余に報知して来たものがあつた。此時余は此文士は何の為に罪もない「土」の作家を侮辱するのだろうと思つて苦にが々しい不愉快を感じた。理窟りくつから云つて、読まねばなら

ない義務のある小説というものは、其小説の校正者か、内務省の  
検閲官以外にそうあろう筈はずがない。わざわざ断わらんでも厭いやなら  
厭で黙って読まずに居れば夫それまで迄である。もし又名の知れない人  
の書いたものだから読む義務はないと云うなら、其人は只名前ただ前丈だけ  
で小説を読む、内容などには頓とんじやく着やくしない、門外漢と一般であ  
る。文士ならば同業の人に対して、たとい無名氏にせよ、今少し  
の同情と尊敬があつて然るべきだと思ふ。余は「土」の作者が病  
気だから、此場合には猶なお更さらそう云いたいのである。

明治四十五年五月







# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 『土』に就て

——長塚節著『土』序——

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 夏目漱石

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>